大へび小へび

片山廣子

青空文庫

日本では蛇の昔ばなしがたくさんあるが、アイルランドの伝説にも蛇が多いやうである。同じやうに島国のせゐかもしれない。初めに私が読んだのはごく太古のこと、北方の山の湖水に劫を経た大蛇が、将来えらい人がこの国に来て蛇族全部を退治してしまふといふ予言をきいたので、さういふ災禍の来ない前に海に逃げてしまはうと思つて、一生けんめいに湖水から逃げ路を作り始める。行くみちみちで沿岸の家畜どもを喰ひ荒し、時々休息し、さうして又水路を掘る。いさましい人間どもが大蛇を攻撃してくるが、いつも人間の方が負けてしまふ。しかし大蛇も負傷したり殺されかかつたりして、永い月日を経て漸く海まで水路を通す。大蛇の作つた路がシヤノン河になつたといふ話である。

そのえらい人といふのは聖パトリツクのことださうで、さて聖パトリツクの伝には、この聖者はローマの奴隷として少年の日を過したアイルランドを愛する心深く、自由の身となつて後ふたたびアイルランドに渡つてキリストの道を伝へたといふ事である。キリスト紀元五世紀ごろのこと、波にかこまれた島国は森と山と野はらと沼ばかりで住む人はすくなく、至るところに蛇がのさばつて、大きい蛇小さい蛇、中蛇、おろちの類までこの国を住家にしてゐた。聖者は一人の弟子と共にいろいろな困難と戦ひながら休むひまなく西に東に伝道してゐる時のこと、或る山かげのせまい道を通りかかると、道に蛇が寝てゐたが、めづらしくもないので弟子は跨いで通つた。蛇は忽ちをどり上がつて弟子を喰ひ殺してしまつた。聖者は、聖者といへども人間だから、この時までうつかり歩いてゐたのだつたが、大事な弟子を眼前に喰はれて、大いに怒つて「けしからん蛇のやつ！　退れ、退れ、汝のともがら、永久に消滅せよ」と叱りつけた。その殺人蛇はその時いそいでするすると消えてしまつたが、あらゆる蛇どもがこの時をきつかけに段々どこかに移転して行つたらしく、アイルランドはいつの間にか蛇の島ではなくなつた。むろん聖者の伝道のおかげでもあつたらう。（キリスト教と蛇とは仲がよくない）ドラゴンを踏まへてゐるのはイギリスの聖ジヨージで、アイルランドの聖パトリツクでないことは門ちがひみたいだけれど、大むかしはどこの国でも蛇が人間の大敵であつたと見える。

後世になつてアイルランドの伝説には蛇でなく妖精が出てくるやうになり、お話はだんだん殺伐でなくなつた。人間も殖えて強くなつたのであらう。

わが国の蛇の話も、はじめの方のは大きい。素戔嗚の尊が稲田姫を八岐の大蛇から救つた話はどこの国にもありさうな伝説である。その大蛇は頭と尾がおのおの八つあり、背中には松や柏が生へて体ぜんたいの長さが八丘八谷に這ひ渡つたといふから、相当の長さであつたと思はれる。ほんとうにそんな大きい物ならば稲田姫のおとうさんの家なぞにはいり込むことは出来なかつたらう、それが伝説なのである。

崇神天皇の御代、倭迹迹姫の夫となつた大物主の神は或るとき姫の櫛ばこの中に隠れた。あけがたに姫が櫛ばこを開けてみると、にしき色に光る小さい小さい蛇がゐたといふ、これはすぐれて聡明な人間のむすめと神とのあひだの悲劇で、日本書紀も姫に同情してゐるやうに読まれる。

仁徳天皇の御代、北方の蝦夷らが叛いた時、上野の勇将田道を大将として征伐させたが、その時の蝦夷はひどく強く、田道は石の巻

の港で戦死してしまつた。田道の家来が主人の手纏を取つて田道の妻に持つてゆくと、妻はその形見を胸に抱いて自殺し、この夫妻の死はひろく世間から惜しまれ手厚く葬られた。その後しばらく経つてまた蝦夷が攻め込んで来て田道の墓を掘りかへした。すると墓から大蛇が出て来て多勢の敵をくひ殺した。喰はれなかつた奴らもみんな蛇の毒気にあたつて死んだ。石の巻の町に入るすぐ手前の畑に今でも「蛇田」といふ名所がある。「……五十八年の夏五月、荒陵の松林の南の道にあたりて、忽に二本の櫪木生ひ、路をはさみて末合ひたりき」と本に書いてある。それは田道が死んでから三年目の事であつたが、昭和の御代の或る年、私は仙台にゐた娘を訪ねて、松島から石の巻に遊びに行つた時、「蛇田」の中ほどに今でも一むらの松林があつて、田道の墓がそこにあるのを見た。これは大きい悪い蛇の話。

　人間がだんだん殖えて世の中が賑やかになると、歴史のおもてに蛇はでなくなつたやうだ。藤原の道長が栄華の絶頂にゐた時分のこと、大和の国から御機嫌伺ひとしてみごとな瓜をささげて来た。夏のゆふ方で、道長は「ほう、うまさうな瓜だな！」とその進物の籠をながめてゐた。そのとき御前に安倍晴明と源頼光が出仕してゐたが、安倍晴明は眉をひそめて「殿、ただいまこのお座敷には妖気が満ちてをります。この籠の瓜が怪しく思はれます」と眼に見るやうに言つた。すると頼光がいきなり刀を抜いてその瓜を真二つに切つた。瓜の中に小さい蛇が輪を巻いてかくれてゐた。これは殿を恨むものの思ひが蛇となつてその瓜にこもつてゐたのだといふ話であるけれど、加工品の中に蛇を隠し込むのとは違つて、瓜の中に初めから蛇の卵がひそんでゐて瓜と一しよに育つたと考へてみれば、それはやつぱり陰陽師安倍晴明が言つたとほり妖しい瓜であつたのだらう。これはごく小さい蛇。

　まだわかい北條時政が江の島の岩屋に参籠した満願の夜に岩屋のぬしの蛇が現はれた。その時蛇体ではなく美しい女性の姿にみえた蛇は人間の言葉で時政に未来の事を話した。まぼろしが覚めた時、その女性が立つてゐた辺に三片のうろこが落ちて光つてゐたといふ話で、これは少しも怖くはなく、頼もしい美しい、古い伝説風でもある。

　わが国の田舎には蛇のたたりの物すごい話が沢山あつて、それはみんな邪悪な気味のわるいものばかりで、歴史に出た表向きの蛇たちのさつそうとした行動とは大きなへだたりがある。古いむかしの蛇たちは同じ蛇族の中の英雄であつたと思はれる。

　もつと世界的な話ではイヴが見た蛇。神はイデンの園のどの樹の実をたべてもよろしいが、たつた一本だけ、その実をたべるべからずとおつしやつた。アダムとイヴの二人は正直にその命令を守つてゐたとき、蛇が出て来てイヴを誘惑してその禁断の樹の実を食べさせたのである。聖書にはその物語がこまごま述べてあるけれど、蛇については「神の造りたまひし野の生物の中に蛇もつとも狡猾し」とあるだけで、蛇の大きさは何とも書いてない。常識で考へて素戔嗚の尊の退治した大蛇のやうなものではなく、草原の上にすべり出て女と話をするのにちやうどつり合ひのとれた小蛇のやや大きいのであつたかと思はれる。しかし大小はともあれ、どんな大むかしでも、蛇は今日と同じくによろによろしてゐたに違ひない。女が気持よくそんな物と話をしたといふのが不思議である。さうするとイデンの蛇は無形の物で、イヴの頭の中にだけ見えたのかもしれない。

イヴはその頭の中の蛇といろんな問答をして、樹の実を食べる決心をしたと考へてみれば、かなり素ばらしい生意気な女であつたやうで、それがわれわれ女性みんなの先祖であつた。

遠い国の蛇や、古い古い蛇はさておき、私の家の蛇を思ひ出すと、今はもうかなりの過去になる。大森の家はずつと以前は畑であつて、十軒ぐらゐの農家がその辺に家を構へた、そのうちの主人がよその土地に移つた一軒の家を改築して私たちの家としたのである。相当のひろさの地所で、道路に添うた三方の境には古い欅と榛の樹が農家らしく立つてゐた。十年ぐらゐ経つて主人が亡くなり、私と二人の子供だけ住むのには広すぎる家であつたが、引越すことのきらひな私は何時までもそこにゐた。その時分のこと、大きな蛇が塀ぎはの欅から欅に伝わつて歩くのを往来の人たちがよく見るやうになつた。あれは片山さんとこのヌシらしい、そつとして置けと近所の人たちは子供が石を投げるのを叱つて止めた。門側の垣根で、住居にはうしろだつたから私たちはその蛇を見なかつた。しかし或時それを見た、一本の樹から隣りの樹に這ひつたはる姿はひどく長いものだつた。一ばん大きな欅にうろがあつて、その中に住んでゐるのだらうといふことだつたが、植木屋が刈込みの時しらべて見ても何もゐないと言つた。あの蛇はもう死んだのだらうと私たちが思つてゐると、その後一二年して門のそばの小さい冬青の木に一ぴきの小蛇がぶらさがつてゐた。これはたぶんヌシの子よと、みんなできめて、そうつと触らずに置いた。時をり小蛇はその辺に見えてゐたらしいが、誰も気にもとめず、そんな事はすつかり忘れて静かな月日が過ぎた後、戦争が始まつた。

まだ私は古い家を捨てて疎開しようとも考へてゐない時分、晴れた九月の朝だつた、茶の間と居間との前の芝生に一ぴきの蛇がだらんとのびて寝てゐた。中へびであつた。死んでゐるらしいと、東北の農村そだちの女中は棒をもつて来てそれを引つかけようとした時だつた、蛇はいきなり頭を上げて六尺ばかり跳び上がり、すつと身をうねらしてきらきら光つて芝の上を走りはじめた。すばらしい早さで私たちの眼の前を滑り忽ちのうちに陰の方にかくれて行つた。生きてゐたのね！　どうしてこんな明るい芝の上に寝てゐたのかと、私たちは話し合つた。いつぞやの小蛇が育つたのでせうと女中は言つた。さうすると、あれは家のヌシなのねと、私は奇妙な気もちになつた。家に何か変つた事が起るときヌシが現はれるといふ言ひつたへを信じるともなく私は信じてゐたらしく、そんな話を電話で息子の家に話した、新井宿の家に何か変つたことがあるのかもしれないと私は言つたけれど、若い人たちは、そんな事ないでせうと年寄の心を安心させようとした。

昭和十九年の初夏、蛇の事なんぞもうすつかり忘れてしまふほど忙しく、私は井の頭線の浜田山に疎開して来たが、そのあと私たちが長く住みふるした家は強制疎開でこわされて今は畑となつてゐる。いまになつて考へると、正しくあのヌシが私の家の消長の姿を教へに来たのであつたらう。勁いながい姿がすうつと庭をはしつたその朝のことが、めざましくはつきり思ひ出される。ヌシは、畑となつたあの広い空地のどこかに今もゐるのだらうか？　ふしぎに私はその蛇に少しの気味わるさも感じない。むしろ恋しいくらゐにそのほそい銀の形をおもひ浮べる。

青空文庫情報

底本：「燈火節」月曜社
2004（平成16）年11月30日第1刷発行
底本の親本：「燈火節」暮しの手帖社
1953（昭和28）年6月
入力：竹内美佐子
校正：富田倫生
2008年10月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大へび小へび

片山廣子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/